茶湯獨り譜　一

451

[stamp]

序

夫(ソレ)人は霊(レイ)也と云(イウ)やさしきをば有て玉琢(タク)
を五常(ゴジヤウ)と云る砥(ト)に金(カナメ)磨(トギ)尽さばさ人
たる目のごとし　又儀(ギ)藝(ゲイ)はよく水
のごとし　家に茶を楽(タノシ)む人も有全(マツタク)
藝(ゲイ)は我ざとこへも品(シナ)を改(アラタメ)雅(コヾカ)
より推(アツバ)しや稚(シロル)は児子(チゴ)邪心(シヨシン)なし家輩(トモガラ)は道(ミチ)
を明らかし某(ソレカシ)利(リ)識(ミヨク)を云(ユン)の流(ナガレ)を汲(クミ)濁(ヒトリ)
漕(コギ)を云(イウ)文(ブン)船(セン)をわくり守(トコロ)よりその
他(タ)人をちがへん世を恥(ハヅ)かしんは何(ニ)ごとら
儀(ツヽミシン)て恐し擢ものや



[stamp]

洛陽鮹薬師

井上茶全軒新七選

當世茶之湯獨漕一

立テ様 居ん

立テ様之手を爲

同掌お用ひるき人を茶ノ湯までまなくに
客之方ハ前切もに其よ系会格合の日何習自
またり九門茶一事此物失の上損多紙合之
又多仍ても分切ら深との人ま八

文章

本ん何日に此茶一刻中多くとら承悉雅ゑ
んれ以是ふ御合くもくりて一の事し

客の方ゟ返事よ　御茶下され候ハ辱き礼
をアセし　又客の方ハ彼の翌日までも
礼状を遣スし人数も無沙汰候ハゞ是を認メ
正客ゟ亭主へ ことさせもすし
又亭主ゟも返事もらす 亦ハ返事よ及ずす
もあり
一客茶之湯よ参に先ッ支度すべきを是とす
又湯メ 爪取 足爪先取 十徳上下 衣紋扇
振楊枝 懐中よ手拭 帛紗 香少し 用意ス
替きる又替足袋 何ぐも手形へ入るゝ
書し　正客おあれ後手を手習 設見也
を持参の事へ 彼ん送り連中亦おぬ



中てはり孔中入る由云出之
亭主ハ後代白ヲ入て ちゞんゆし
客が後代持参を見て 替まつりじん
戸をゆし入て閉るゝ
客入て紙門を窺 亭主くゞりの戸を明
行夜より上下の孔を見 此手より入て出
中くぐれ戸 ほぐれたるとぬきさしけて
後代あるかく内へ入
客くぐれ外へしまよ座敷の門を入て
おるゝ静に入来し げさの人戸を立メ
内後代出し石きく渡れハ石燈籠 植込 莊り

雲院を見る　高聲よ頭しるすなし
ゐ鄙にまあを色ちらとみ　插抄の意を
あらく流むりもよこふおの盃を
志つりふカ掛ヶ行ヶカ猊指をうけるて
にり里上の戸を静まめ　先ッ内とみ　釜れ
また考ともゆって　縁とに正入ぶつを
けぶみの切こ猟に立掛て盃次こ同年下座
あと戸を占める
床のかけ物を見て大目に入棚荘茶炉を見座
に着次と同り座を立見待之
亭主勝手口分考とメおほるまよれ礼儀れ味こ
を施く礼をも云まづゆりともと云て勝手へ

入ちね茶道口分あく入れ炭取不炭斗色々出
持ち出す切りこみ入れ志ャ中に置灰器左く持出
戸立メ羽箒炉の左方に置大目れ炉を左よ
釜ホ紙を取りメ釜をうけ釜ホかけ釜ま取り
置釜あけかお勝手のま迄へ遣り置をまんだし置
茶碗炉中を見る深くうら炉中を見るとして置く
灰をさし羽箒めまよ置し持炉縁を掃めて
爪を色々也白炭を深くかれ上へ申り炭取の
其炭をかびん取炉へ入之中炭分火箸にて炉
手置持置之香合入かまと置持炉中へ一葉とも入之
客香合入まて之白炭ハ炭斗に広く深くれ
くあと方へ申す羽箒にてめまよ置きて仕舞

下より出　客ハ香合拝見　客炭とり炭斗を見て
炭を洗ひ亭主居向き帛さし釜の蓋取湯かげ
んを見蓋置へ乗せ香合入炭斗口へ片口へ手前
持出釜の蓋取水指蓋〆釜ぬきし蓋受出るも
ふさき片口に漆炭斗口より炉の炭を取見て
釜にかゝる釜引寄加手前炉へかゝる也紙釜敷挟ス
炭斗より羽箒にて炉の縁を大引く
炭斗口入粉釘を致し灰を致しても炭斗の紙灰を戸
くらやうき所へ桐所へ茶菓子引揃〆炭斗
口さし出之茶菓子桐所へ入物口へより出桐
かけ物の方を見て中立をする也亭主座戸
立てよろし





亭主ハ路の戸を開床のかけ物取花生ケ替
出置所へ指持出茶入茶杓。取物じく入取と
折之客座敷の時宜ヲ〆
のまゝ入座を見路下座〆立亭主茶巾を
羽箒之内を改むる事を点て戸を閉め茶杓を
客茶碗出置持茶入出
置持組合之炭斗分揃水翻竹帰出置持
出下居路〆翻下に置いまひ〆蓋置よ
揃持掛ひさの時宜を云め置茶碗取出置し
茶入茶入へ乗せ茶碗との間に置袱紗出置
細と紐出置袋中じめぐせ茶入の紐結の前へ置
袋中指にかくる茶入巾で手置し可

けら紀の手大隅茶巾手為んて為
茶入ぬく時蓋を取て蓋ゝ内を見るよ習有
手の為負子有 茶杓 茶入れよかけ茶器のごとく
茶筅水器茶入の脇よ置 茶巾 水器れ取指盞
の上よ置 茶碗水器を見ん揚杓取水器の
左よ持右にし帛出し 釜ゝ蓋を取湯を吸茶
碗へ入め器蓋メ揚杓置莵め器 茶筅水器取
茶碗へ入湯は三つメ引上見ん水器の元へ寄り茶
引き寄りめ器さげ碗湯捨 水器茶巾しぬく
ひ内よ入茶碗右にし水器持下よ置茶巾取くさめ
元へ寄り水器茶杓取め器茶入取茶入るこ
茶入元へ寄り茶杓をし茶くぶ年ゝ茶入へかけるなり



揚杓水器の取左よ持右にし帛くん釜ゝ蓋取
揚杓水器指締 湯一汲 茶碗へぬくかけんを見
入て水器茶筅取茶をぬり元へ寄り帛を出し
茶碗水器出す之 客ハ左内おさめ時宜有て又
亭主よ出りて内おしと時宜済くさ右にし
取左との色茶碗帛の上への色ぬくと見ん水器の
おいてゞさ二つ三口との次ゝ同ゝ下座茶
碗上座へ戻ス上座水器のいきとりて茶碗水器見
元へ浴と見んまるや 亭主ハ茶點出し座敷の
口のかゝとつんて茶筌の好き去メ揚杓釣瓶へ
あけ中仕舞とまるこ 洗茶碗も洗らんと云ふ
前水杓の取さ湯揚杓取水器角のかさ取水

入まへ茶碗帛容ヶ瑚ヶ帛取茶碗取て
いきを中下ふ戴ふと右一ツ取て扎右扎入
ひさの時宜云て柄杓取湯入ゐなゆひ入
茶巾を左ハしいさぐの也み湯すき
捨て釜入て茶筅をとて茶筅へやり釜に茶巾
まて袋を巾ひ内へ之下ニ置茶筅入茶杓
帛ん好く時客ヶ茶入を乞茶碗へ推の事
茶入如為前へ出帛し口を拭ふ蓋をとメ前と
さうくとぬき出ス茶杓にても出ス茶入扱如く入也
みせ拵為まて云々　柄杓取釜へ手入さし柄
杓取左手持右之蓋をメ杓行輪にかけ水指の
蓋をメ柄杓行て釜て取鏡より入て指揚へ

取此時如為前をとり入て釜指居蓋と時味す
如為の茶入茶杓偽るを客右揖揃
と乳有立炭ふ色すると事　立炭すと
前より同中関さうきとしんよし　客ふひ
也云を次の方へ通ス手前世の風様ふ書
院へ通し以前取設有　手跡のさて奥ニ有
事を話し口をお　之子の一乳王ニ云客
分色客乳とよ事を高も以卸し也
ヤ合スけし
此通る勅人大様よし

# 手之圖目録

○炭取を持手
○羽箒を持手
○灰を蒔ク手
○炭を次ク火箸を持手
○片口ん釜白水指ス手
○釜かけたる人を持手
○柄杓引切てる翻柄手合持替る手
○香合持火箸ん薫物類へ入る手
○蓋置よ柄杓置る手

○茶碗茶白当る手
○茶入茶白当る手
○茶入代袋ほとき紐の手
○茶入袋より出し巾ウ寄手
○茶杓取る手
○茶巾取る手
○茶筅取出ス手
○柄杓たより持容の好さ取手
○茶碗茶をたつる手
○柄杓取て脂手
○湯を汲手

○揃ノ風炉手おろし并

○茶碗ふく手

○茶筅とうじ

○茶巾たゝみ手
付帛たゝみ手

○茶入ル手

○茶筅にて茶ふる手

○茶入おく手　蓋取手

○茶碗出ス手

○茶碗見ル手

○茶入見ル手

○茶碗お呑手





○茶碗茶のつきをゆる手

○茶碗見ル右左の手

○茶入袋を戻ス手

以上

茶之湯手さばき手引手七拾五手と申伝之

## 茶道居どころ

○かねしうれまで。○揃候て茶亭内ハやめ

○つむりゆうめまで

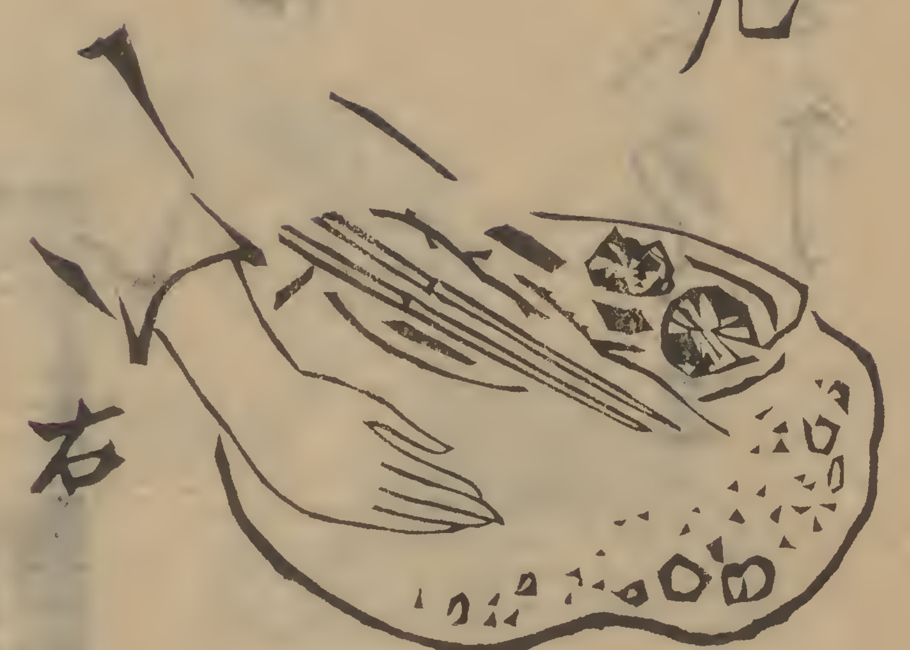
○ひざたうまで志ほみまで

○座そせたうつぶまで　居所ハ向を手付

○茶亭内扉の大ひづみよそく紙ニ居
○手前内へも外へも折きぬ中に
○居所をよりとくしおの方へ推おス様ニ居へし
○左手の先ハ帯をのせてよし
○居ん見え吉
○道具扱ハ高くてよし

〔上

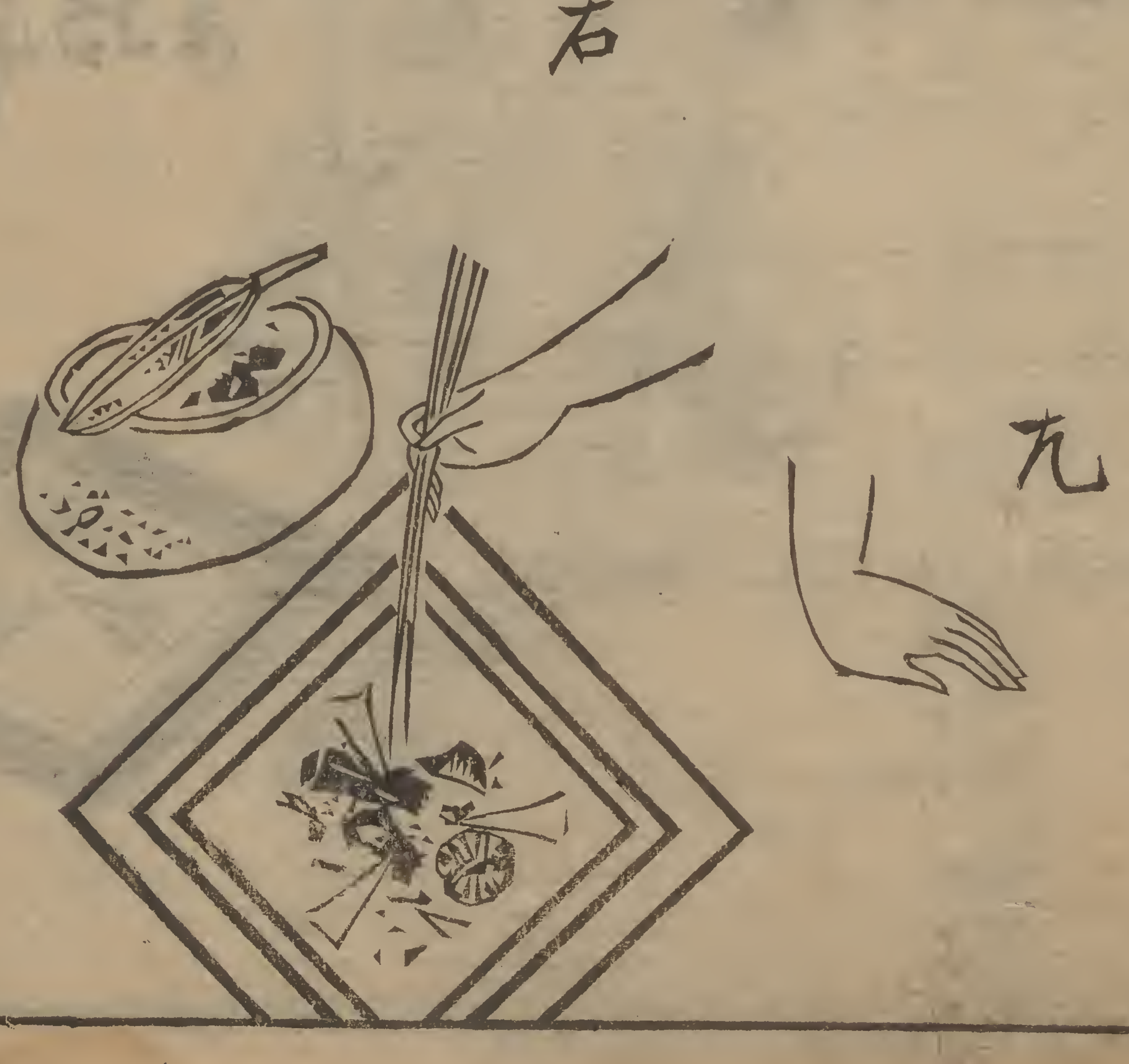
炭取持手



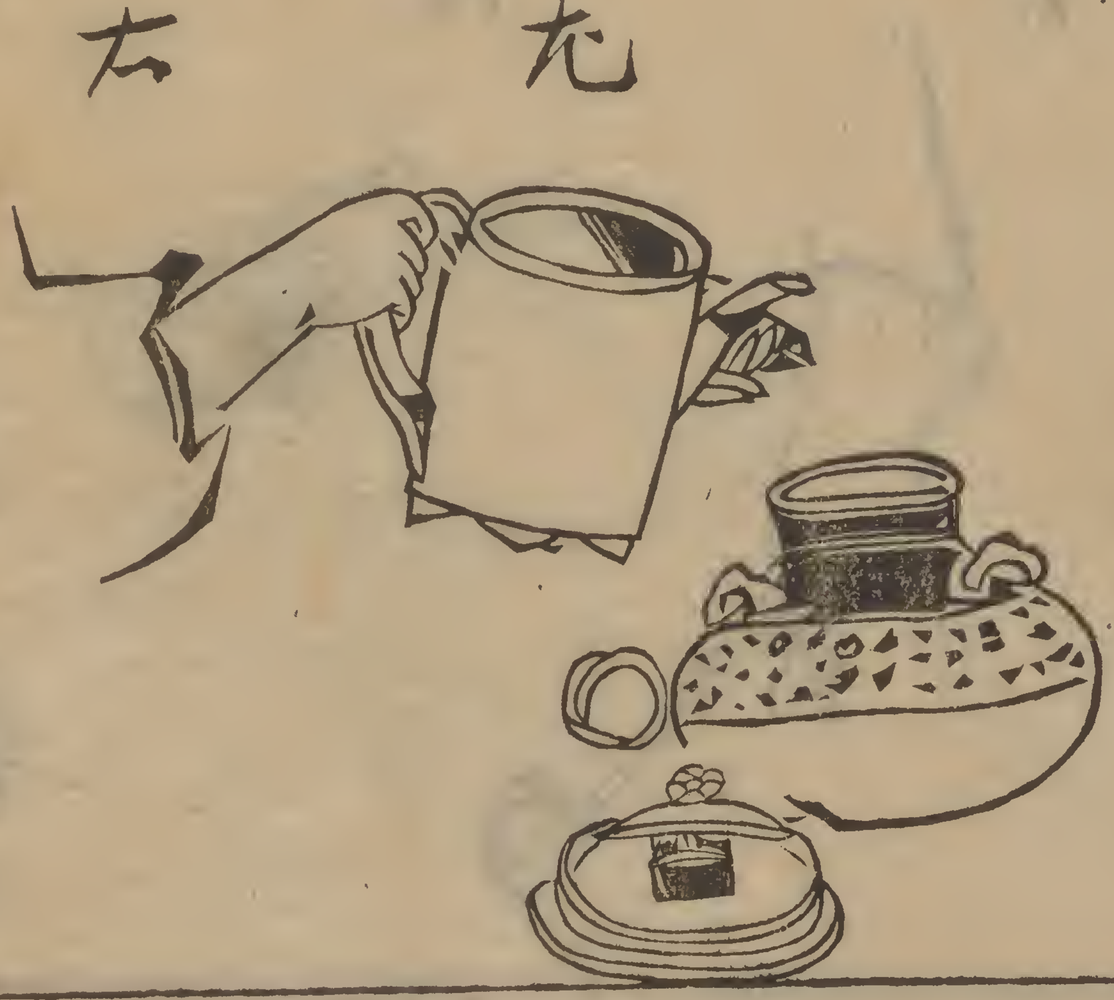

羽箒持手

炉へあつま
敷手

炉へ炭を次手




所口　釜に手指



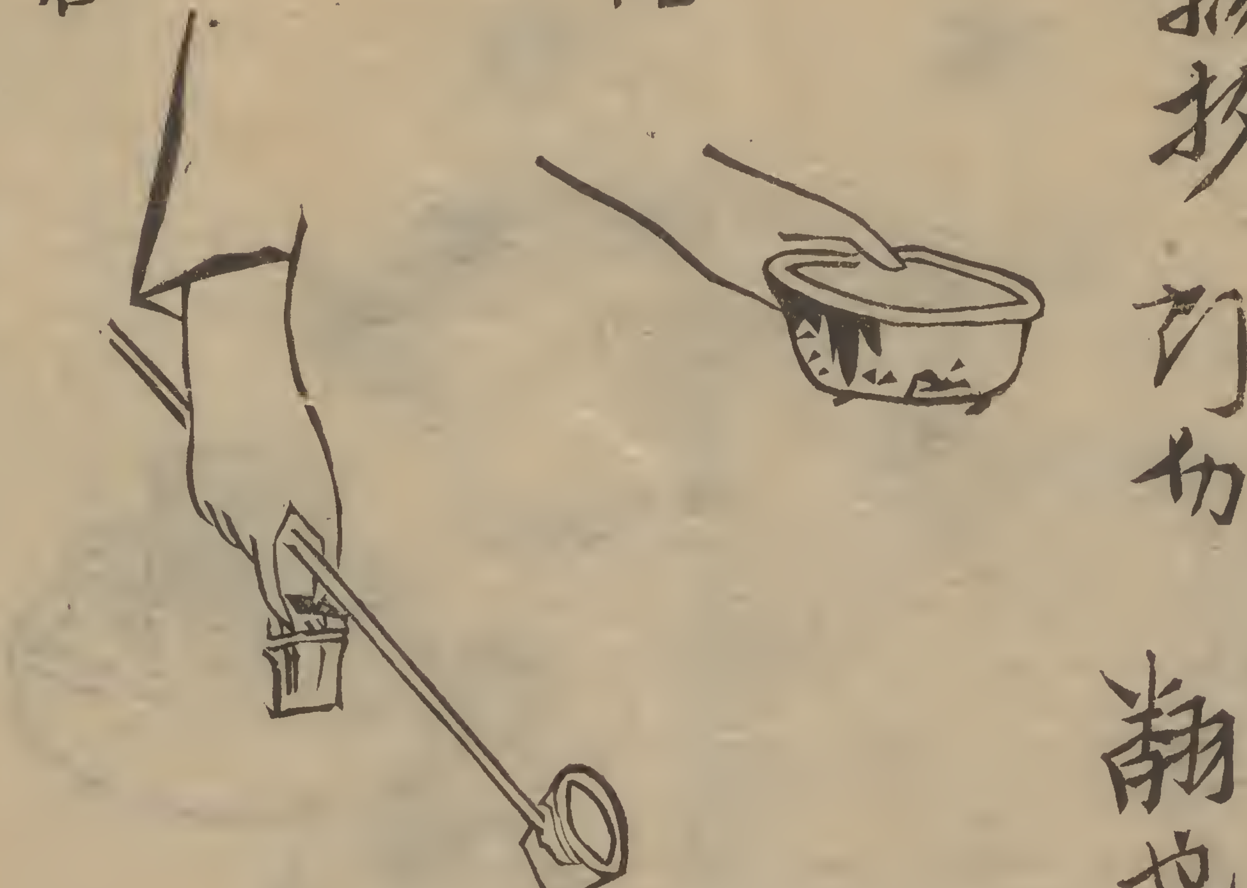

○釜かけおろし
手替の手

柄杓打切

瀞也

右

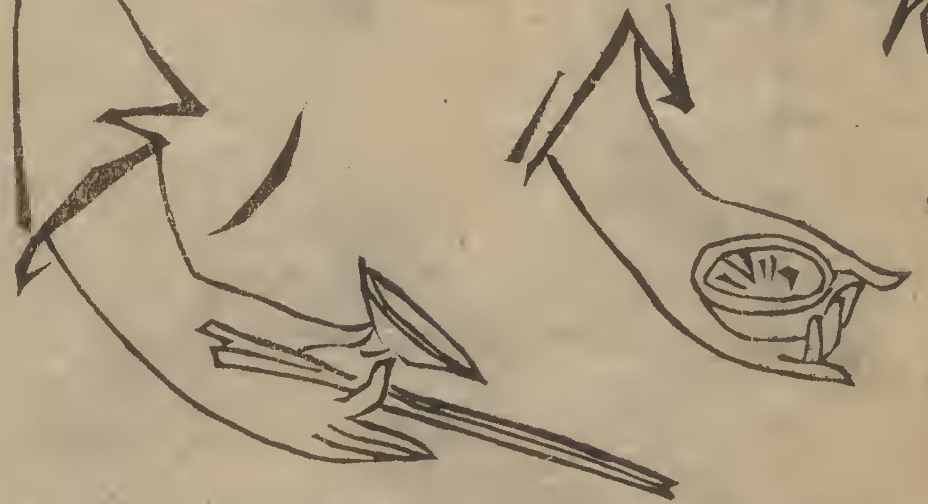
左



釜あげ炭挑ニ香合入

右

左



柄杓取扱ル

手 右

左

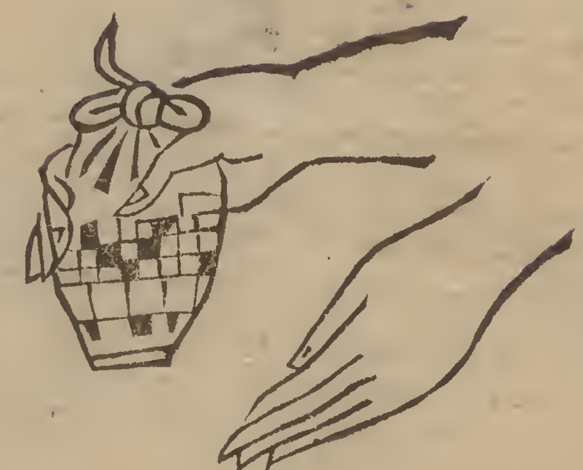
蓋置ヘ柄杓置ク

右

左

茶入おへ口寄ル手

左　右



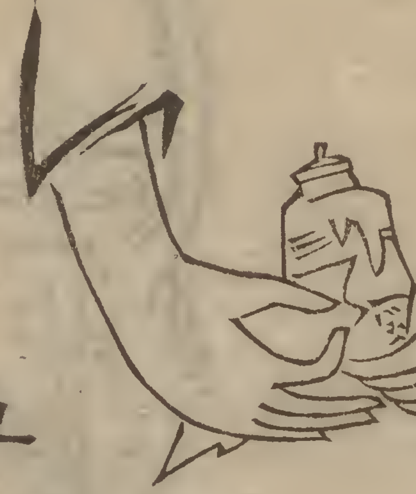
茶碗茶巾寄ル手

左　右

水指
ちとひおお入

左　右

茶入仕ふ把

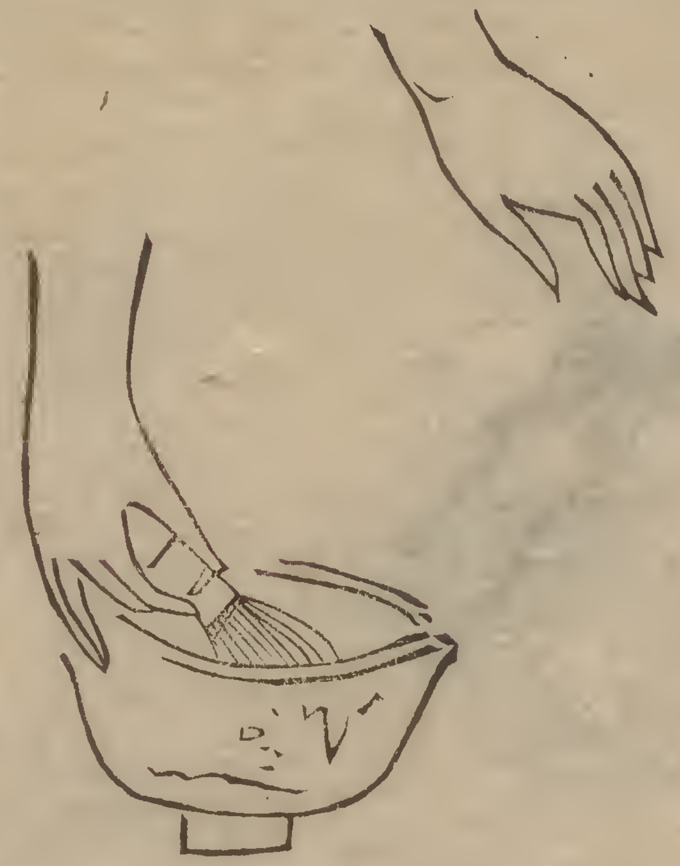


中次茶入扱ふ手

左 右

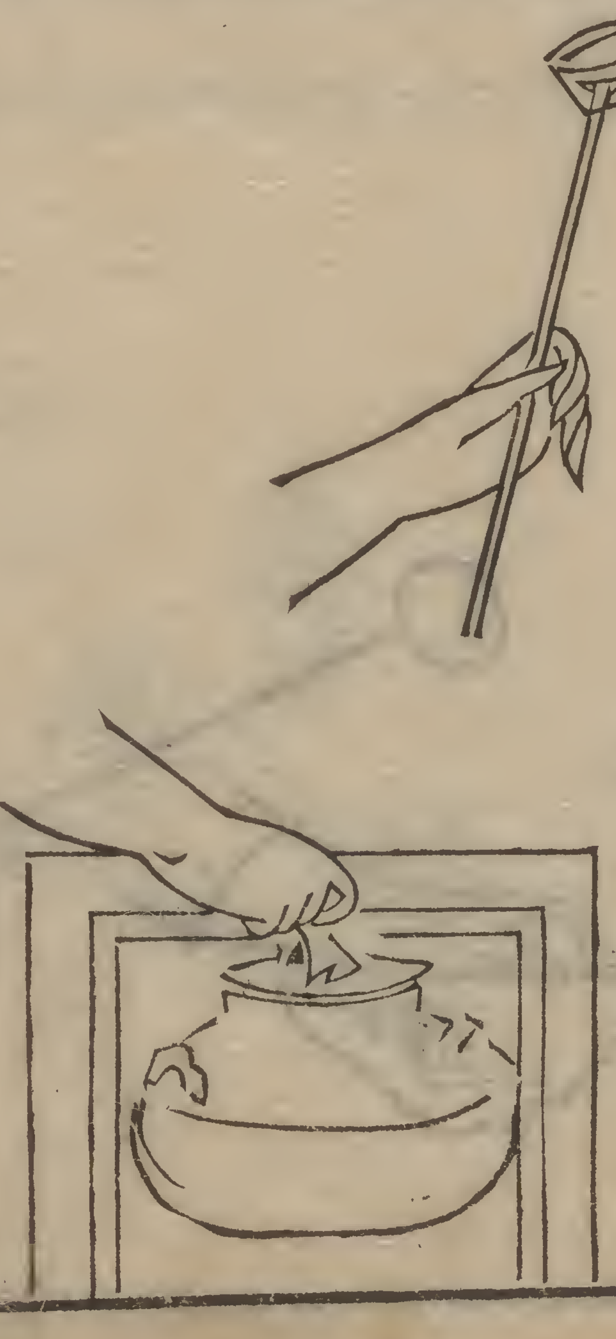
左 右

茶杓くれる手



茶筅を出

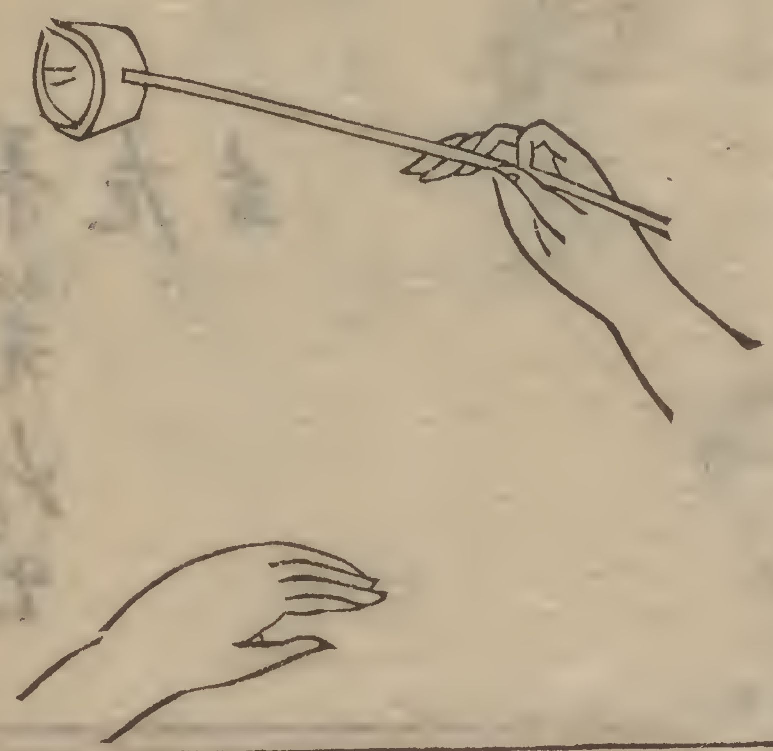
左 右



柄杓左より扱

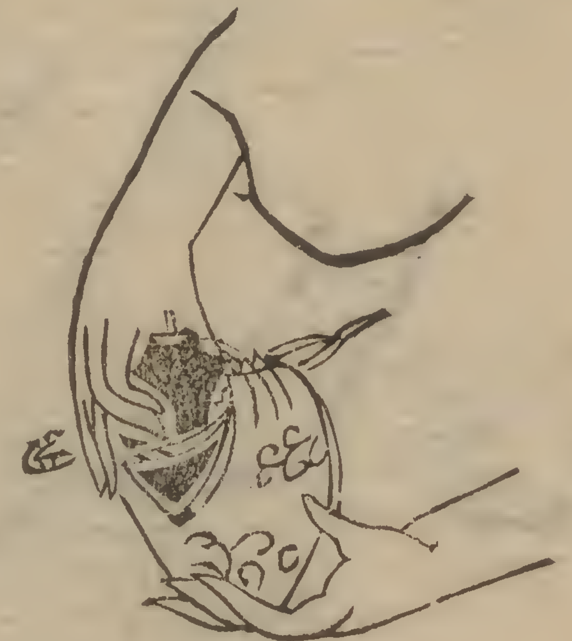
右帛蓋を

風炉柄杓
右
左

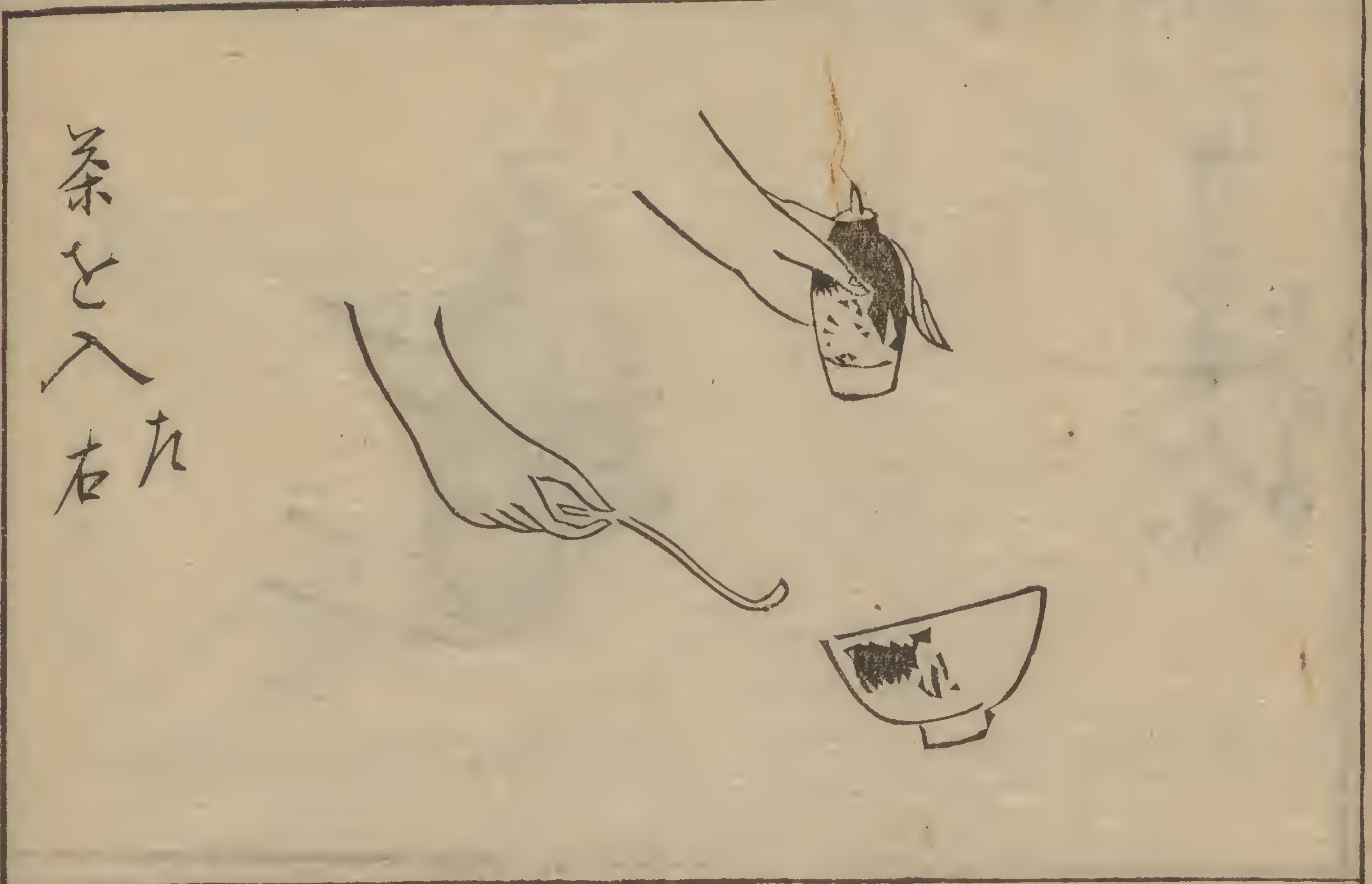


茶碗
茶をとる

中く茶入も
れの手

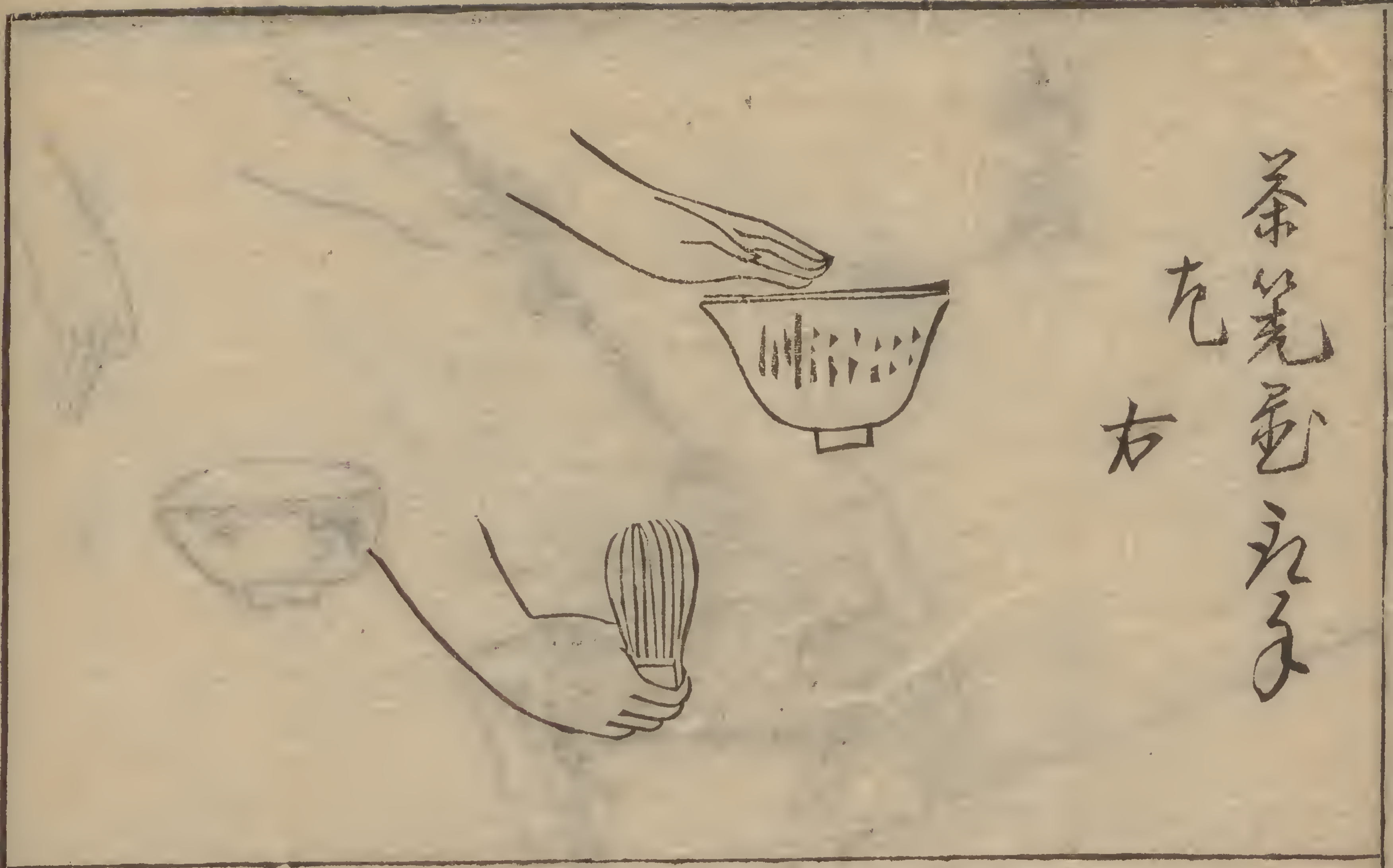


茶杓
茶入へくるゝ手


茶を入れ
右

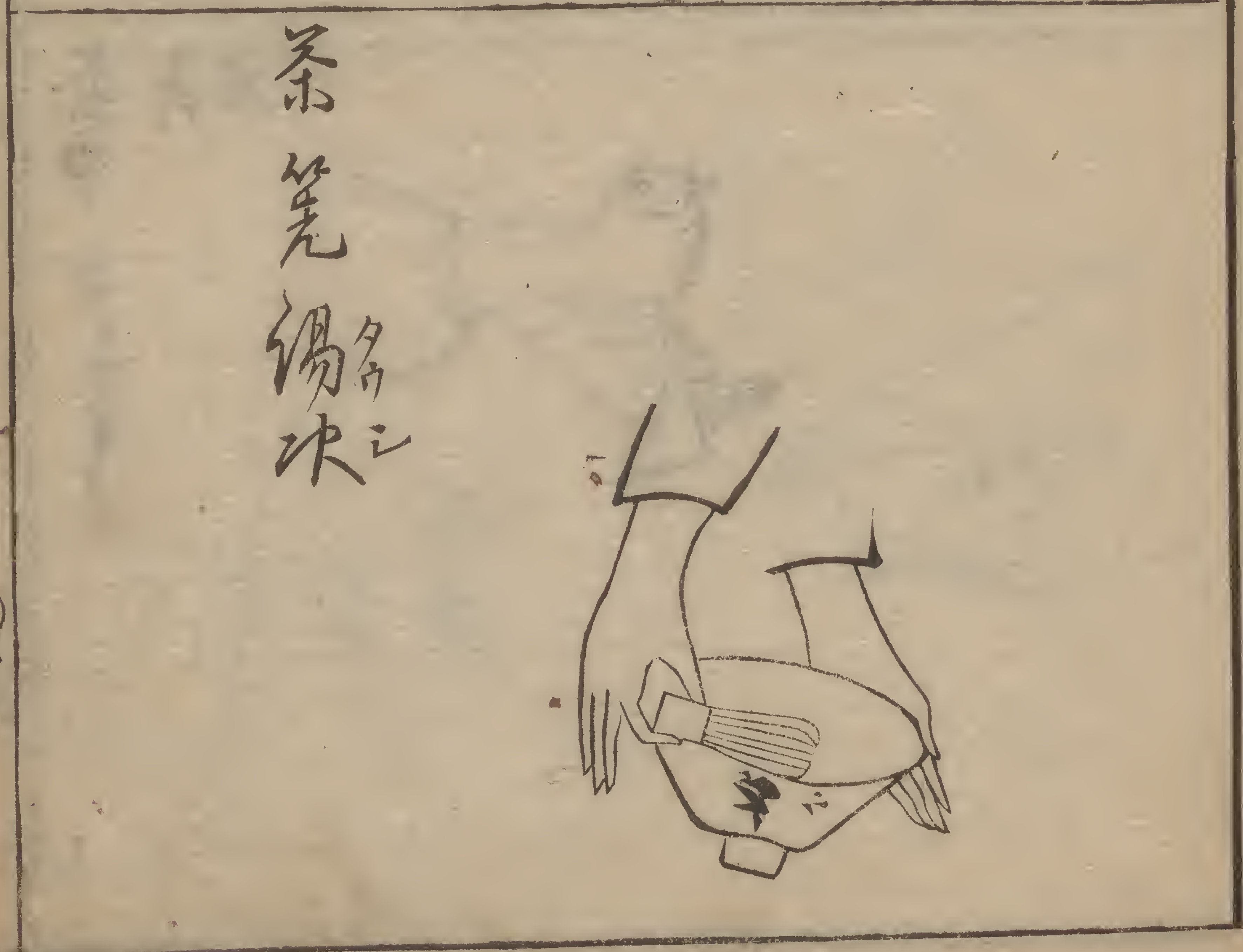
茶入
蓋明
右左

湯汲
茶碗中くゝ巾より
右左


茶筅置え手
左
右

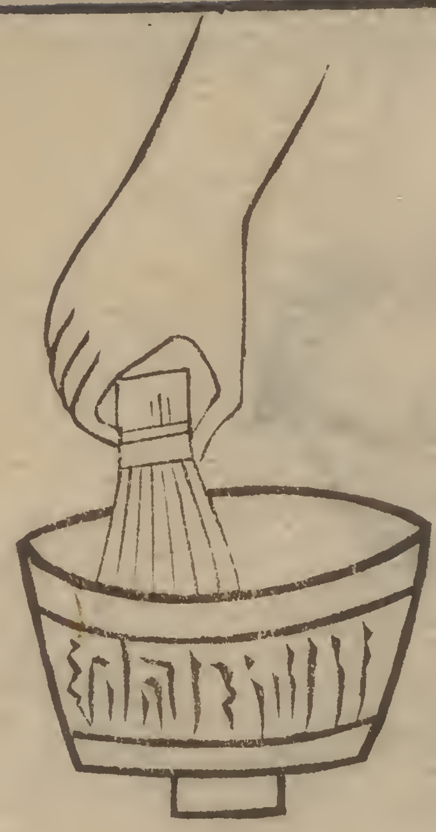
茶巾置
左
右

湯をつけ引上
ぬき茶筅の図


茶筅湯次

茶點

左右



茶巾さばき

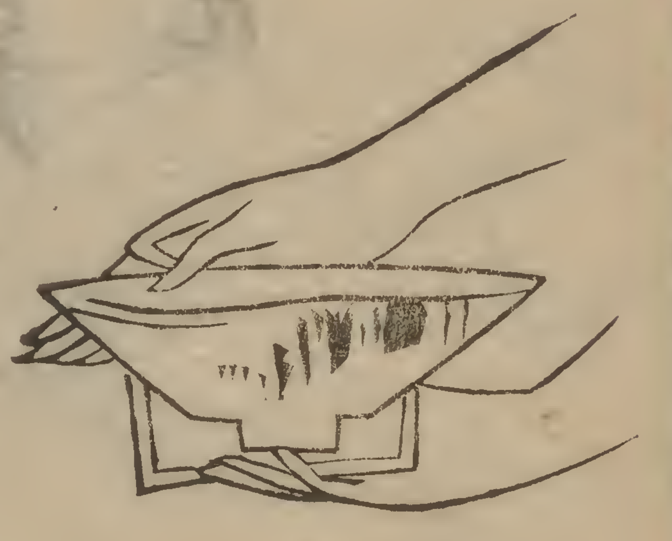
左右

茶筅通し

左右

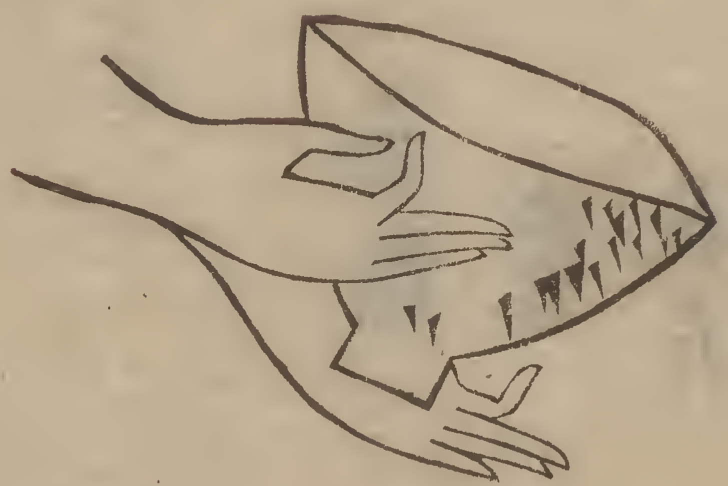
茶點出ス

左右

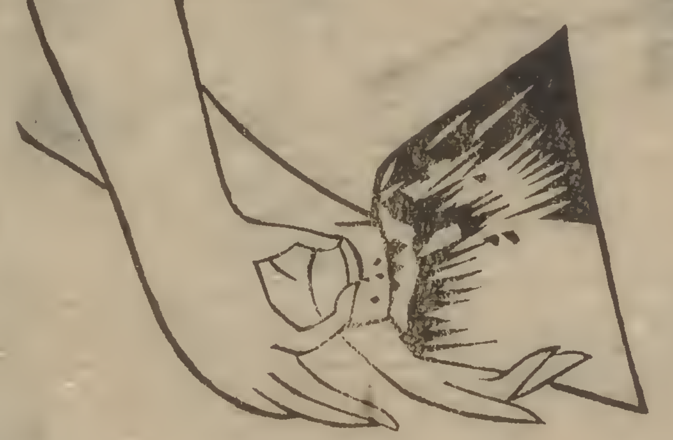


茶のむ手
左
右

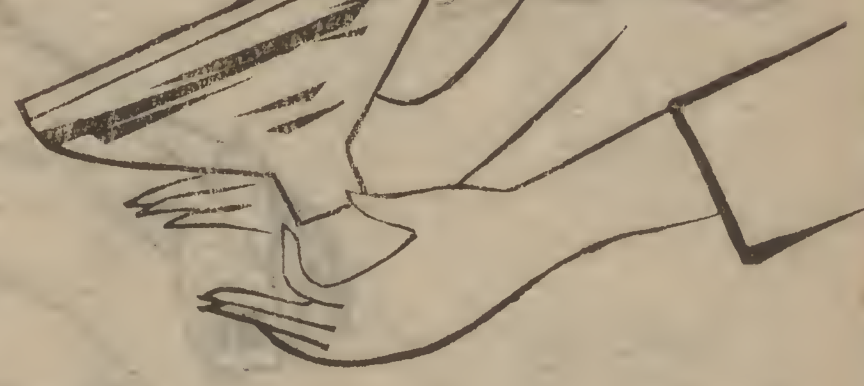
香をかぐ
左
右

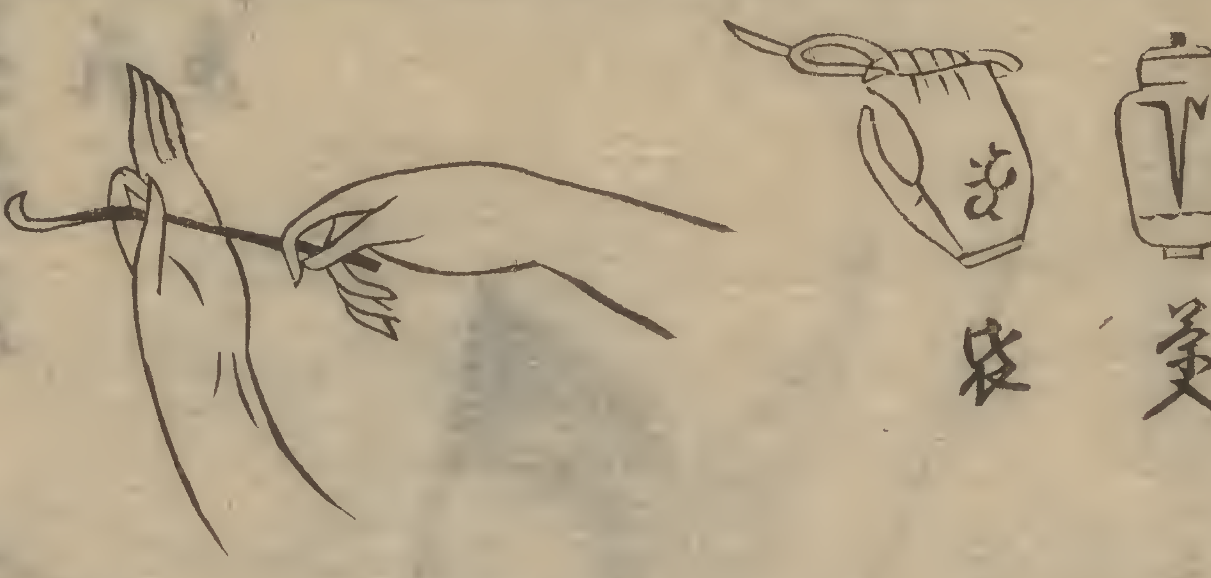


茶筅足
左
右

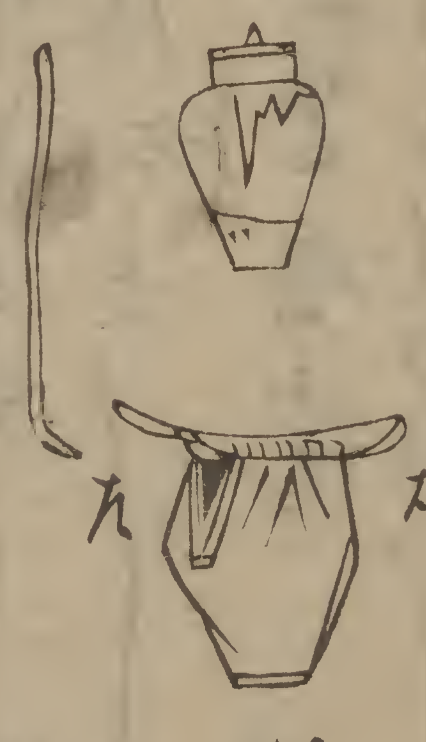


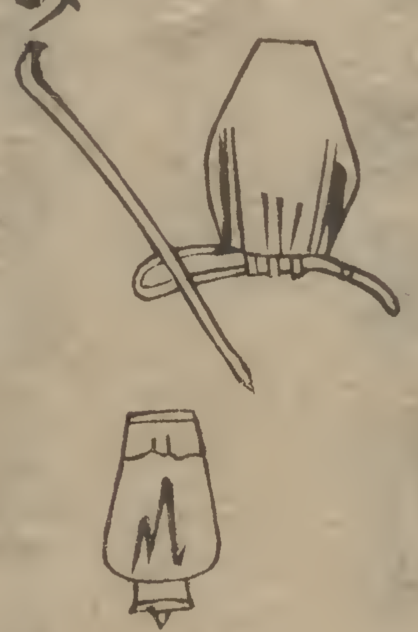
同
左
右





袋ノ様
左右
指ト入レヌモ
ノ様有



手ゝ圖大槩

但し茶ゝ湯は大事のんにはさ稽古は

席をかまれど

席はあらくハ稽古とはかねよと云聞

有

それハあさらけはなするは似ね

ハ叶ふあらんもあるまし似て

ものをと君は云しり

みとり茶湯まらぬは茶を嫌て

流茶をたてしや手なりとも知れつし

終